



## KVBC 2月例会

2012年2月21日(火)

2月21日(火)、京都タワーホテルにて2月例会(ものづくり研究会と合同)が行われました。今回は、KVBC会員であり、京町家、古民家などの改修に取り組んでおられる株式会社アラキ工務店 取締役会長 荒木正亘氏を講師に迎え、「棟梁」として、「会社経営者」としての思いをご自身の長い経験をもとにご講演いただきました。

今回の講演会は「棟梁が話す中小企業経営」をテーマに(株)アラキ工務店取締役会長荒木 正亘氏を講師に迎えて行われました。まず井上代表幹事より、「現場に精通し、長年、経営に携わってこられた荒木会長に、本日は、経営の神髄を聞かせていただく良い機会を得ました。修業時代から現在に至るまで様々な経験をもとに語っていただき、皆様の企業経営に役立てていただきたいと思います」と開会の挨拶があり、講演がスタートしました。

今年79歳を迎える荒木会長は、もともとは亀岡の出身。母が嵯峨・嵐山一帯の大工棟梁の長女という御一家に生まれました。幼いころから身近だったこともあり、自然な流れで大工

を目指すようになったと言います。「修業時代は奉公も含めて5年10か月でした。今の方の感覚からすれば長いと感じるかもしれませんが、職人としての心構えを学び、独り立ちするようになるにはやはり長い期間がかかります。私は『水は方円の器に随う』(人は交友関係や環境によって良くも悪くもなるというたとえ)を座右の銘に仕事を続けてきました。大工の修業はひとつの現場にとどまるのではなく、半年や1年といった期間で現場をうつります。それぞれの場所ですできるだけ良い仲間、良い先輩を見つけてたくさんのことを教えてもらおうという気持ちで、自身や会社の成長のためにも必要なことではないでしょうか」。

その後修業時代に築いた交友関係を礎に、京都市右京区に「アラキ工務店」を法人化。40年の長きにわたり、棟梁として会社経営者としてその手腕を発揮されています。「私たち大工の仕事というのは非常に提案能力が問われる仕事です。例えば、古くからの京都の町家にはお風呂があると少なく、あったとしても非常に粗末で改修費も高いのが当たり前でした。時代の流れもあり、そういった水回りの仕事をさせていただく機会が増えたのですが、いかに値段を安く、そして使いやすくできるかということに常に心をかけていました。結果、当時のお客様が今でも私を訪ねて依頼をしてくださるのは非常にありがたいことです」。また、後進の育成のために技術や提案能力の向上をはかる棟梁塾の取組にも長年力を注いでこられました。「棟梁というのは他の職人に比べてそんなに技術が抜きん出ているというわけではないと思います。では、棟梁にとって大切なのは何かというと、『目配り、配分、方針』です。現状を把握し、適材適所の人材配置ができているかを確認し、現場の人間が一つの方向に向かっていけるような方針を立てる。これが揺らいでしまえば、住まいづくりというのは成立しません。ですから皆さんも常にフットワークを軽く、現場に出向き、社員の声を聞き、お客様の声を聞くことが顧客の満足度につながりますし、企業の成長にとっても必要不可欠なことではないでしょうか」と結ばれ、2月例会は盛況のうちに幕を閉じました。

